

先生は奥深い洞察力があります

子ども発達学部心理臨床学科4年

松本澄恵(まつもと すみえ) 愛知県・中川商業高校出身

4年生の江口ゼミは、15名が所属しています。担当教員の先生は、江口昇勇先生です。昨年の「子ども発達学専門演習Ⅰ」は、自己探求を主に、自分の円柱家族描画法、コラージュ療法、夢分析を行い、仲間とディスカッションをしました。今年の「子ども発達学専門演習Ⅱ」では、各々卒論の研究のテーマについて考え、今まさに取り掛かろうとしています。

学生の質問に対し先生の言葉に含まれる奥深い洞察力により、学生から毎回、「ワー」という歓喜が出ます。「すごい、そういうことか」と、今まで学んだ臨床心理学の理論、技法、心理検査法などをお互いに確認し、ゼミナールの時間は和やかに過ぎていきます。そして、江口ゼミは昨年から継続している自分の夢分析や、ゼミ生が実際に支援している場面(定期的ボランティアなど)に対し、互いに自分の考え、思った分析を素直に発言、伝えることができる安心な時間、空間でもあります。

支援される方(子ども)を、より理解できるようになるのは、自分自身についても理解することが対人支援で大切な一つだと思います。自己を知ることは、楽しい反面苦しいこともあります。ゼミの仲間に生まれた信頼関係により、苦しさを乗り越えつつ、自分を見つめ直し、考え方も広がったように感じます。



弾けなかった私がピアノを弾けるようになりました

子ども発達学部子ども発達学科保育専修3年

富井ひかり(とみい ひかり) 宮崎県・日向高校出身

私は、ピアノが弾けないことで保育の道を諦めようとしていました。しかし、入学したときは全くピアノを弾けなくても、講義を受けて、練習すれば弾くことができるようになった先輩がいるという話を聞いて、頑張ってみようと思いました。

ピアノの講義が始まってから、暇があればピアノの練習をしていました。最初は、どのように練習すればよいか分からなかったのですが、ピアノが弾ける友達に練習方法を聞きました。片手ずつ練習したり、小節ごとに繰り返して弾くようにすると良いとアドバイスをもらいました。また、メロディーが分からないときは一度弾いてもらったりもしました。

ピアノの講義では、先生に教えてもらって練習するだけでなく、クラスでの発表会などもあります。発表会の前は

障害児問題研究会「どんぐりの家」

子ども発達学部心理臨床学科4年

大仲優(おおなか すぐる) 大阪府・大阪暁光高校出身



私は障害児保育問題研究会『どんぐりの家』というサークルに入っています。どんぐりの家は阿久比町で月に1回を基本

にボランティア実践をしていて、普段は火曜日と木曜日に実践でどういことをやるのかという会議や作業などを行っています。どんぐりの家に参加している障害のある方は“どんぐりっこ”と呼んでいて、毎回楽しく活動しています。

保育問題研究会といいますが、どんぐりっこの中には成人になられている方もいますので、幅広い障害や年齢の方々と関わることができます。どんぐりの家は担当制で行っているので、担当になったどんぐりっことはより深く関わっていくことができます。4年間活動すると卒業するのがとても寂しくなってしまうと思います。もちろん、多くのどんぐりっこともたくさん関わることで、多くの経験や将来に繋がることもあると思います。

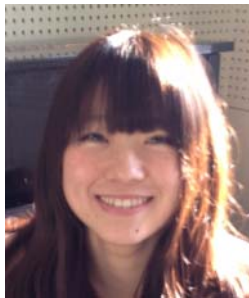
私自身、このサークルに入ったきっかけは知り合いの先輩を通じてでした。障害のある方と関わりたいと思って入りました。最初はどうか関わればいいのかわからなかったし、やっていたのか不安もありました。しかし、回数を重ねるたびにどんぐりっこのことも少しずつ理解していき、楽しくなりました。優しい先輩とともに活動する仲間たちも大切な存在だし、ボランティアは大学生らしいなと思っています。

日本福祉大学は、ボランティアサークルが多く存在します。きっとどれも魅力的で、意義のある活動だと思います。大学生になったらぜひぜひボランティアに参加してみてください。日本福祉大学に入学するのなら、ぜひどんぐりの家へ入会してください!!

みんなが必死に練習するため、ピアノの空きがとでも少なくなります。だから計画的に練習しておくことをお勧めします。

私がピアノを弾くことができるようになったのは、繰り返し練習を続けたからだだと思います。ピアノを弾くことも、楽譜を読むことも慣れることが大切だと思います。できるようになるとピアノを弾くことが楽しくなるし、次の曲も頑張ろうと思えるようになります。また、練習の仕方を教えてくれたり、一緒に練習してくれた友達のおかげでもあります。みんなには本当に感謝しています。

私はまだ、弾ける曲のレパートリーが少ないし、1曲を完全に弾けるようになるまでかなりの時間がかかります。練習すれば弾くことができるということを知ったので、また時間を見つけてたくさん練習をしていきたいと思っています。



子ども発達学専門演習Ⅰ(西島ゼミ)企画(プレーメンの音楽隊人形劇)

この号の主な内容

- 新たな旅立ち・就職への道 学生インタビュー その1 1
- 新たな旅立ち・就職への道 学生インタビュー その2 2
- 東内ゼミは学生主体のゼミです「教師になる!」熱い思いが叶った 3
- 先生は奥深い洞察力があります 障害児問題研究会「どんぐりの家」ピアノを弾くことができるようになる 4

● ● ● We Love こと た つ

— 日本福祉大学 子ども発達学部ニュースレター —

第12号 2014年 5月15日発行

新たな旅立ち・就職への道 その1

2014年3月15日、卒業式が行われ、子ども発達学部から302名の学生が卒業していきました。4月以降の進路をみると、心理臨床学科127名中、相談指導員・支援員15名(11.8%)、介護職員28名(22%)、自治体福祉職員(児童相談所等)3名(2.4%)、特別支援学校教諭14名(11%)、高校教諭1名(0.8%)、保育士1名(0.8%)、大学院進学9名(7.1%)です。子ども発達学科初等教育専修62名中、小学校教諭13名(21%)、特別支援学校教諭12名(19.4%)。保育専修は113名中保育所保育士56名(49.6%)、幼稚園教諭15名(13.3%)、施設保育士12名(19.4%)です。

卒業式後、卒業生数名に、就職への道について、インタビューしました。

子ども発達学部子ども発達学科保育専修卒業

影山夕姫(かげやま ゆき) 鳥取県・米子北高校出身

影山夕姫さんは、公立保育所の保育士になります。鳥取県出身で、遠くからやってきて福祉大で学び、再び地元に戻って公務員保育士として働くことが決まっています。



Q. 影山さんは鳥取県出身です。私も鳥取県出身なのですが、よくわかるのですが、鳥取県はとても遠いです。しかも大学進学を考えると、県外に出るなら関西圏か関東圏を考えると人が多いです。影山さんは、なぜわざわざ福祉大に入学しましたか?

影山:実は、もともと子どもへの虐待問題に関心がありました。虐待問題や虐待防止などについて学ぶならどこか、と調べたら、日本福祉大学になりました。

Q. そのような思いで入学した福祉大ですが、大学で学べたこととしては、どんなことが印象に残っていますか?

影山:「ふつう」の子どもについてだけでなく、障害児の保育や、最近よく耳にする「気になる子」について、学べました。それらがどういうものなのか、どのように対応すればよいかなど、学べたことが印象的です。

Q. 影山さんが就職活動に取り組み始めたのは、いつ頃ですか?そしてどんなことに取り組みましたか?

影山:もともと保育所保育士になりたかったのですが、進路については、最初の夢を貫き通しました。3年生の10月頃CDP講座が始まったので、それとともに公務員講座を受けるなど、就活を始めました。

Q. 就活で努力したことは何ですか?また、後輩へのメッセージがあれば教えてください。

影山:採用試験勉強については、自分の決めた進みたい進路に集中して進めてください。そして、保育所保育士を目指す場合、早めから準備を始めることが大切です。特に保育所保育士については、保育所実習が実習の中で最初に始まることもあって、専門的な講義や演習が1~2年時に集中しています。学び終えてしまうのが早いので、思い出すためにも早めから始めてください。

予めインタビュー項目をお知らせしていたわけではないのに、すらすらと答えてくれた影山さんでした。現場で、障害のあるお子さん、虐待の可能性のあるお子さんなど「気になる」お子さんに出会うこともあると思います。福祉大で学んださまざまなことを現場でしっかり活用してほしいと思いました。

新たなる旅立ち・就職への道 その2

子ども発達学部子ども発達学科保育専修卒業

向田美里(むかいだ みさと) 岐阜県・益田清風高校出身



向田美里さんは、名古屋市内にある民間保育所への就職を決めました。

Q. 向田さんの出身地から浜までの地域を考えると、岐阜県や名古屋市などに様々な保育士養成の学校があると思いますが、なぜ日本福祉大に来ることにしましたか？

向田: 私は、障害児保育を学べる大学がどこかと考えたときに、周りの人から福祉大を紹介していただきました。

Q. その福祉大を今日卒業しましたが、大学で学べたことは何ですか。

向田: 「何をするにしても1人ではできない」ということを学びました。連携やつながりが大切だということがわかりました。

Q. 進路を決める契機は、何でしたか？

向田: 実際に実習に行ったことです。障害児者施設で働きたいと考えていましたが、施設実習に大きな影響を受けました。障害児施設に行きましたが、勉強不足を痛感しました。障害児の養育をしたいと思っていますが、いきなり最初から施設に就職するのではなく、保育所保育を現場でしっかり学んでからにしたいと考えました。

Q. 就職活動として努力したことは何ですか？

向田: 一番大切なことは、子ども観や保育観など、自分の考え方にあう保育所を探すことだと思います。それを見つけるために、私は保育所の合同展に行きました。そこには様々な保育所がブースを作っていました。そこで園長先生と話をし、保育所でやっている活動などをしっかり聞きました。

試験勉強としては、時事問題を中心に学びました。面接に向けて自分の考えをしっかりと表現できるように努力しました。また、話すときに適切な敬語を使うことができるように勉強しました。

Q. 後輩へのメッセージをお願いします。

向田: いろいろな実習を経験し、迷ったり、心が折れたりすることがあると思います。そのようなときは気が向かないけれども、いつか必ず役に立ちます。心が折れてもあきらめないでがんばってください。

就職することでかなう夢だけでなく、将来を見通して考えている向田さんです。自分の夢にどうしたら近づけるか、大学以外でも様々な学びの機会に参加しました。そのような取り組みもまた向田さんの現在を培っていると思います。

子ども発達学部子ども発達学科保育専修卒業

大谷 領(おおたに りょう) 愛知県・南山国際高校出身

最後の向田美里さんは、大学時代のサークル活動や実習を経て、児童養護施設保育士になりました。

Q. 福祉大にはどうして来ることになりましたか。

大谷: 外国にいたときに進路を考えましたが、保育士をめざそうとしたときに、日本福祉大学がいいと判断したからです。

Q. 本学で学べたことは何ですか？

大谷: 印象に残っていることは、養護に関わる学びでした。特に立場の弱い子どものことを学べたことです。

Q. 進路を決めるときに考えたことは何ですか？

大谷: 私の場合、保育所や幼稚園では自分のやりたいことができないと思いました。私のやりたいことは、指導案などを作り、一定決められたことを保育・教育していくことではなく、親のない子や不適切な環境におかれている子どもに関わりたいと思いました。それは、サークルで入った児童養護施設や施設実習をした児童養護施設での子どもたちとの出会いと関わりの中で思ったことです。だから、施設への就職をしたいと考えました。

Q. 後輩へのメッセージがあれば、ぜひお聞かせください。

大谷: サークル活動やボランティアなど様々な機会を通じて、名古屋市内・愛知県内の児童養護施設の職員さんたちに顔を覚えてもらう努力をしました。関係を広げて、直接交渉することもありました。最終的に決めた就職先には、夏前にはアルバイトに入り、実際に子どもたちと関わり、養育する経験を重ね、1月に就職が決まりました。



後輩に伝えたいことは、「就活を人まかせにしては絶対ダメ」ということです。全部自分で動かないといけないと思います。

半年以上かけて施設現場に入り、子どもの気持ちをしっかり受け止め、養育実践を工夫するなど力を蓄えてきた大谷さんでした。

インタビューによって、大学時代の学びやサークル活動、ボランティア、アルバイトなどを通じて、自分の進路を見つめ、しっかりと進路を切り拓いてきたことを確かめられました。教員としてインタビューできたこと、嬉しく思いました。卒業生の皆さん、学んできたことを現場で生きて働かせてください。インタビューにこたえてくださって、ありがとうございます。

(子ども発達学科教授 遠藤由美)

東内ゼミ それは学生主体のゼミです

子ども発達学部子ども発達学科保育専修4年

辻 翔太(つじ しょうた) 愛知県・御津高校出身

こんにちは。東内ゼミ4年の辻翔太といいます。東内ゼミでは、障害児支援団体PAKAPAKAのお手伝いをしながら、一年間、子どもを観察し成長の記録をつけていくことをしています。子どもと一緒にピザやバームクーヘン、流しそうめん、お茶を作りながら、食育について学ぶことができます。農業体験として鶏をさばいたり、田植えをしたりしました。またこの活動では一年間同じ担当の子どもを持ちます。毎回同じ子どもと接することができるので、回を重ねるごとに関係が深くなっていき、子どもたちの小さな成長を感じ取ることができます。私の担当した子どもは、出会った当初、人見知りをしたり、自分から他の子どもと遊ぶとしない子でしたが、一年たったころには、名前を呼び合って、いろんな子と遊べるようになっていました。保育実習では限られた短い期間の中でしたし、クラス全体をみなければならぬので、一人の子どもとずっと関わるという経験できなかったのも、実習では得ることができない学びを得ることができました。



「教師になる！」という熱い思いが叶った瞬間

子ども発達学部心理臨床学科卒業

渡邊 恵(わたなべ めぐみ) 大阪府・向陽台高校出身

教員採用試験合格発表の日、ドキドキしながら合格者リストを見ると、自分の受験番号が載っていませんでした。家族に「やっぱりあかんかったわ〜。来年頑張る!!」と伝え、慰められました。その後、シェアハウスをしている友人が起きてきて、もう一度合格者リストを確認した結果、どうやら私は別の選考枠の合格者リストを見ていたことが分かりました。自分の選考枠を確認し、受験番号を見つけた瞬間、涙が止まらなくなり、その友人と一緒に号泣しました。夢が叶った瞬間でした。

「高校教師になる!」と本気で思ったのは、大学3年生の時です。他の友人と比べるとずいぶん遅かったのですが、その後はセミナーや研究会などに頻繁に出席し、その志を更に高めていきました。小さいころから大嫌いだった読書も、いつのまにか大好きになり、教育関係や社会科系の本はどんどん読むようになりました。今では履歴書に「趣味…読書」とかけるまでになっています。

私が採用試験に合格することができた一番の理由は、周りの人の支えがあったからです。もともと政治・経済は得意であったため、その分野における苦労はあまりありませんでしたが、今まで一度も授業を受けたことがない倫理には苦戦しました。ゴールの見えない勉強に対して日に日に不安は高まり、泣きべそをかいたこともありました。その時に「何を不安になっているんだ! めぐみなら大丈夫。」と



また、11月には大学に子どもとその家族が遊びに来るということで、その企画の全てを私たちに任せてもらいました。ゼミのメンバーと何度も話し合いを試行錯誤を重ねながらなんとかやりきり、無事好評をもらうことが出来ました。みんなで一緒になにかをやりきる体験をすることで、メンバーとも仲良くなれた気がします。

東内ゼミは基本的に学生主体のゼミです。1、2年のうちは何もなくても必ず先生がやることを与えてくれましたが、私たちのゼミはすべて自分たちで考えてゼミを作り上げていかなければなりません。つまり、ゼミを面白くするのも、つまらなくするのもゼミ生次第ということです。自分のしたいことをしたい! 他ではできない体験をしたい! という主体的な人は、ぜひ東内ゼミに来てみてください。おもしろい先生が待っています。

目指せ!
熱中先生!

の私をつくってくれたみんなです!!

